

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	森本 光
論文題目	The Vertical Structure and Symbolic Inversion in the Works of Edgar Allan Poe (エドガー・アラン・ポーの作品における垂直構造と象徴的転倒)		

(論文内容の要旨)

本論文の目的は、19世紀のアメリカ作家エドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe) が作品内の空間にいかにして垂直構造を構築しているかを明確にした上で、その文学の本質を象徴的転倒の観点から捉え直すことである。代表作の一つである “The Fall of the House of Usher” のタイトルにも表れている通り、fall の単語がポー文学のキーワードであり、詩や小説に垂直方向の運動が頻繁に見られることは明らかだが、本論文はそれによって生じている上下の位置の転倒現象に注目することで、各作品の意義を考察している。また、これまで高く評価されてきた代表作だけでなく、ポー研究において軽視されがちであった作品を数多く取り上げることで、より包括的な作家像の構築を試みている。「象徴的転倒」という用語は、バーバラ・A・バブコック (Barbara A. Babcock) が編集した論文集 *Reversible World: Symbolic Inversion in Art and Society* に由来している。この書物は、さまざまな時代や地域の文化や芸術に遍在する転倒現象に焦点を当てた論文集であり、文学に関する論文も複数含まれているものの、文化人類学の分野に属する。他分野の知見を踏まえながら、文学の枠を越えた文化現象としてポーの作品を捉え直すことで再評価している。

第一章では、ポーがキャリアの最も早い時期に発表した五つの短編小説を取り上げ、物語の内部の空間の垂直構造と種々の二項対立の階層関係がいかにか結びついているかを検討し、ポーがすでに象徴的転倒の技法を確立させていることを明らかにしている。この章で考察の対象となっているのは、“Metzengerstein”、“The Loss of Breath”、“The Duc de L’Omelette”、“Bon-Bon”、“A Tale of Jerusalem”の五編である。最初期の短編における空間の上下は、精神と身体、言語と物質、人間と動物、西洋と非西洋などの二項対立と結びついており、上下の位置の逆転が生じることでそれらの二項対立の階層を転倒させている。ジャンルや創作の手法は様々でありながら五つの作品が一貫した意図に基づいていることを明確にしつつ、初期のポーの意図が西洋のロゴス中心主義的な価値の体系の転覆にあることを論じる。この章ではポーの作品における象徴的転倒がいかなるものであるかが紹介され、その後続く議論の枠組みを提示している。

第二章では、同時代のアメリカ文化に対する意識に焦点が当てられる。西洋の歴史や文化の基盤への批判精神が色濃く表れている初期の短編とは異なり、1830年代後半から1840年代初頭にかけての作品には、同時代のアメリカに対する作家の意識が表れている。ポーが盛んに活動したこの時期は、北部の知的エリートを中心に超絶主義が台頭した時代である。また、民衆レヴェルでは黒塗りをした役者たちによる minstrelsy が娯楽文化として発展した。短編 “Never Bet the Devil Your Head” を取り上げ、主人公の トービー・ダミット (Toby Dammit) が行う跳躍の場面の詳細な分析により、超絶主義と minstrelsy が文化ヒエラルキーを形成していることを指摘し、その上で垂直の空間と象徴的転倒

が生じていることを明らかにしている。さらに、“The Gold-Bug”において、主人のウィリアム・レグラント (William Legrand) が解放奴隷のジュピター (Jupiter) を木に登らせる場面に着目し、そこに日時計の構造との類似性を確認しつつ、太陽と影、主人と奴隷の上下の位置関係が転倒していることを指摘している。19世紀前半のアメリカ文化に関する知識を背景に二作品を読み解くことで、文化ヒエラルキーの転倒の意図を解明している。

第三章では、「美女の死」 (“the death of a beautiful woman”) を題材にした作品群を取り上げ、そこに一貫して見られる「横たわり」のモチーフを垂直性と転倒の観点から考察している。この種の詩や小説において、横たわっている姿勢は、眠りを示唆すると同時に、死や性愛といった主題とも関連している。この姿勢の共通性から、ポーの作品では、三つの容態、すなわち眠り、死、性愛の混乱が生じていると主張する。まず、この題材を扱った詩における代表作として“Annabel Lee”および“The Raven”が取り上げられる。この二つの詩はともに、恋人を亡くした男性を語り手に据え、女性との死別を嘆く様子が謳われているが、結末では語り手が死者となった恋人の傍に横たわり、眠ることが示唆されていることを考察している。短編からは、“Berenice”、“Morella”、“Ligeia”、“The Fall of the House of Usher”の四つが取り上げられている。短編では、女性の死を嘆く詩とは異なり、語り手が積極的に恋人の死を願い、そして女性たちは不可解な病によって身を臥せる。しかし、棺の中に横たわったはずの女性たちは物語の終盤に至って回帰し、男性の立場を脅かすことになる。男性と女性の間のせめぎ合いが、垂直方向における上下によって表現されていることを指摘し、横たわりという動作を媒介として男性と女性の立場や心身二元論の逆転が生じていることを明らかにしている。

第四章では、都市を舞台背景とした小説、“The Man of the Crowd”と三つの探偵小説を主に扱っている。1841年は、アメリカ文学の歴史において、もっとも重要な年号の一つとなっている。超絶主義が全盛のこの時代、ボストン近郊に実験的な共同体ブルック・ファームが開かれ、そこに参加したナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) はその年の体験をもとに、のちに *The Blithedale Romance* を創作した。また、ポーによる最初の探偵小説“The Murders in the Rue Morgue”が *Graham’s Magazine* に発表されたのもこの年である。探偵小説は、これまで、近代科学の発展や都市型の社会の形成が背景にあることが指摘され、その流れで、“The Man of the Crowd”が探偵小説との関わりで論じられてきた。本章では、この作品系列が、そうした時代の問題を反映して、従来の垂直的構造が希薄になり、転倒性ではなく流動性がより顕著になっていることを論じる。

ポーには人種主義やミソジニー (女性嫌悪) を指摘する批評が一部には見られ、また、術学を好む貴族的な作家であるというイメージがある。しかし、象徴的転倒という観点から捉え直す時、ポー文学は、そうした作家像がイメージに過ぎないことが明らかになる。転倒性の豊かなポーの文学はさまざまな階層秩序を脱中心化しているという点で、むしろヒエラルキーの下部に位置する周縁的存在を取り上げる文学であると言えるだろう。また、ポーは、科学や都市化が社会にもたらす変化を鋭敏に捉え、転倒性から流動性へ向かうことで、新しい形式の作品を提出した。このように、本論文は、ポーが垂直性と転倒によってその文学を形作っていることを明らかにし、その思考の過程を跡付けている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文の目的は、19世紀中葉に創作した作家エドガー・アラン・ポーの文学の本質を、象徴的転倒の観点から捉え直すことである。すなわち、ポーが作品内の空間にいかにして垂直構造を構築しているかを明らかにしようとしている。ポーの詩や小説においては垂直方向の運動が頻繁に見られるが、本論文はそれによって生じている上下の位置の転倒現象に注目する。明快な論旨を読みやすい英文で緻密に論じていく姿勢は評価できるが、先行研究への言及がやや不足している観は否めない。ただ本論文が、これまで軽視されてきた作品を数多く取り上げることで、より包括的な作家像の構築を試みていることは高く評価すべきである。

論文第一章では、ポーが最も早い時期に発表した五つの短編小説——“Metzengerstein”、“The Loss of Breath”、“The Duc de L’Omelette”、“Bon-Bon”、“A Tale of Jerusalem”——を扱っている。そして物語の内部の空間の垂直構造と種々の二項対立の階層関係がいかにか結びついているかを検討し、ポーが初期においてすでに象徴的転倒の技法を確立させていることを明らかにしている。ポー作品についての本論文の基調をなす概観である。やや図式的な断定とも見えかねないという懸念は、以後の章の緻密な分析によって次第に払拭される。

第二章では、ポーの1830年代後半から1840年代初頭にかけてのアメリカ文化に対する意識に焦点が当てられる。短編“Never Bet the Devil Your Head”については、超絶主義とミンストレルシーが文化ヒエラルキーを形成していること、さらには垂直の空間と象徴的転倒が生じていることを指摘する。“The Gold-Bug”においては、主人公が解放奴隷を木に登らせる場面に着目し、そこに時計の構造との類似性を確認しつつ、太陽と影、主人と奴隷の上下の位置関係が転倒している、と論を展開する。そしてこの二作品におけるポーの文化ヒエラルキーの転倒の意図を解明している。一見大胆と見える立論を緻密な分析で証明しているこの章は、本論文の中でも論者の研究者としての高い力量をもっともよく示すものと言えよう。

第三章では、「美女の死」を題材にした作品群——詩では“Annabel Lee”、“The Raven”、短編では“Berenice”、“Morella”、“Ligeia”、“The Fall of the House of Usher”——を扱い、これらの作品群に一貫して見られる「横たわり」のモチーフを垂直性と転倒の観点から考察している。そしてポー作品に見られる横たわりの姿勢に共通性を見出し、眠り、死、性愛という三つの様態に混乱が生じていると主張する。横たわりという動作を媒介として男性と女性の立場や心身二元論の逆転が生じていることを証明しようとした章である。こうしたモチーフはアメリカ小説ではしばしば見られるもので、その分析がやや新鮮味に欠けるきらいはある。ただ、この章では横たわりを詩と小説の両方に共通する要素として論じ、それなりの説得力を持っている。

第四章では、都市を舞台背景とした“The Man of the Crowd”と三つの探偵小説を扱っている。探偵小説は、これまで近代科学の発展や都市型の社会の形成が背景にあることが指摘され、“The Man of the Crowd”は探偵小説との関わりで論じられることが多かった。しかし本章では、この作品系列が1840年代のアメリカという時代の問題を反映していること、および従来の垂直的構造が希薄になり転倒性ではなく流動性がより顕著になっていることを指摘している。本論文第一章から第三章まではポー作品の垂直構造を明らかにしてきており、第四章はこれまでの章とは違う結論を導いている。論文全体の整合性について疑問を呈する意見が調査委員から出されたことは事実である。ただ、ポーの文学を一貫したものと強弁するのではなく、その文学の変遷をありのままに捉えた上で本質を論じようとする姿勢を評価する意見もあった。

本論文は、ポーの文学を象徴的転倒という観点から捉え直し、新たな作家像を提示している。すなわちポーの文学が、転倒性によってさまざまな階層秩序を脱中心化しているという点で、ヒエラルキーの下部に位置する周縁的存在を取り上げる文学であることを示している。またポーが、次なる段階として、科学や都市化が社会にもたらす変化を鋭敏に捉え、転倒性から流動性へ向かうことで新しい形式の作品を創出したことも跡付けている。

本論文は、ポーの文学におけるこれまで見落とされてきた構造を明らかにしている。その分析は、ポーが生きた時代についての幅広い理解に基づいており、いくつかの知見がみられる。このような視野から書かれた本論文は、アメリカ・ルネッサンス期の文学研究全般に大きく貢献すると思われる。その意味で、共生人間学専攻思想文化論講座の理念に十分適う研究である。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成31年1月24日、論文内容と要約、およびそれに関連した事項について試問を行なった結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版刊行上の支障がなくなるまでの間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公開可能日： 年 月 日以降